

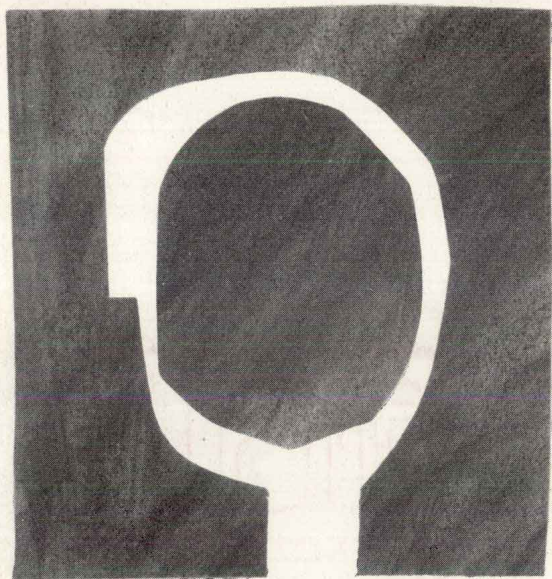
夜の眼

野上 彰

KAWA
PAPER
BA



河出書房



夜の眼・野上彰・河出書房

Kawade Paperbacks 104

夜の眼

表紙絵・イラスト 和田 誠

装幀者 原 弘 (NDC)

昭和39年7月20日 初版印刷
昭和39年7月25日 初版発行

定価 280 円



著者 ^の野 ^{がみ}上 ^{あきら}彰

発行者 河出孝雄

印刷者 小泉輝章

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町3の8

電話 東京(291)3721~7
振替口座 東京 10802

© 1964

印刷・小泉印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

夜の眼*目次

時の鐘が鳴りひびくとき……………七

夜は邪惡なまぶたを開く（ダウスン）

夜はポケットに持って歩く……………三

うすむらさきいろの義眼を（エリュアール）

夜が都会の灯を消すとき……………二四

禍の神は軋む扉を押す（イエーツ）

夜は悪をみごもる……………四一

受胎告知の鐘を鳴らす者は誰ぞ（ワイルド）

夜は野の獣たちを呼ぶ……………完

死神の饗宴の卓に（アポリネール）

夜の仮面を剥ぐものに…………… 六

地獄の紋章をあたえしは（アナクレオン）

夜をして忘却を歌わしめよ…………… 九

夜の帳のなかに地獄を見し者は（チャーチ）

夜の紫衣をまとい 夜の笏を捧げ…………… 一〇

夜の柩を護る者は 冥王か（レッシング）

夜の蟻地獄の谷にずり落ちる…………… 一六

砂の乾いた音を聞くものに（ヴェルハーレン）

夜は祈りの刻を知らしめる…………… 一四

虔しきものに恐れはあらず（ブレーク）

夜は蝙蝠のひろうどの翼もて

ひからびた眼を覆う（ポー）

一〇

夜は月の光を集めてアラベスクの刺青をする

一七

森に住むけだものたちの毛深い肌に（キップリング）

夜は律を破る者に

月光と稲妻を用意する（A・N）

一五

夜よ 囚人を解き放て

この城を閉ざした門を開け（カフカ）

二三

不実な月をかかげる夜は

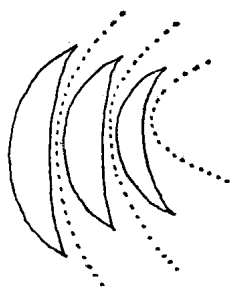
棺桶の骸さえも白銀に彩る（シェークスピア）

二四

夜の 眼

時の鐘が鳴りひびくとき
夜は邪惡なまぶたを開く

ダウスン



△フロローグ▽

すさまじい音をたてて、夜が鳴りひびいている。断崖の上に立つと、星明りに波という波が白い牙をむき出しにして……風は、枯草をなびかせ、ただ一本、崖から斜めに海面に突き出している松の木を、いまにも吹き払うかのように……

舗装された灰色の坂道が、百メートルほど、吉野深雪の前にある。

風に吹きとばされまいとして、深雪はマフラーを首に

しっかりと巻きつける。

午前三時半。

スカンジナビア風の刺繍をした手袋のなかで、腕時計がカチカチ鳴っている。

深雪がトラックから降りてもう二十分以上もたつ。

降りたというのは正確でない。ニキビ面の運転手の頬つぺたを、いやというほどひっぱたいて飛び降りたのだ。

静岡から東京までヒッチハイクを続けてきて、沼津でつかまえた定期便の若い運転手は、はじめは、親切そう

に見えた。それが……

深雪は思い出しても吐き気がするほどシヤクにさわる。

いきなり車を坂下に止めて、

「な、いいだろう」

機械油のしみこんだ手袋が、深雪の細い首にまわった。

それからあとは、週刊実話雑誌の暴露記事そのままの図式だ。ただ終りだけがちがっていた。

いやというほど、ひっぱたいて、道に飛び降りた。ちょうど、後からもう一台トラックが、やってきたのも深雪に幸いした。

手ひどい悪口をあびせかけたが、その声も、風に消された。その悪口が深雪にきこえなかったのは、せめてものことだ。

身体中、あちこちにしみこんでいる男の臭いをごしごし洗いたい衝動に駆られながら、身づくろいして、あれからもう二十分も、寒い三月の夜明けの風に身をさらしているのだ。

およそそこが、S市のはずれにあると見当はついていた。激しく飛ぶ雲の間から、後を振りかえると、雪を被った富士山が見える。

崖の反対側には雑木林。家並みが切れて、人家の灯りもまたたかない。十メートルほど先に、街燈がある。深雪は、その街燈の下に立って、車のくるのを待っていた。だが、いくら待っても、トラック一台通りかからないので、崖の上に立って、前、後の道を見守ることにきめたのだ。その方が、遠くの見通しもきく。

こんな時間では、車という車は、ものすごいスピードで走りすぎるから、うっかりすると、止め損う心配もあった。

ともかくも、強引に車を止めて、朝までに東京へ着いて、友だちの磯野奈穂子のアパートへもぐりこんで、久しぶりのアバンチュールをしゃべりたくてしかたがない。

そのとき、風のなかに自動車の音がきこえてきた。

深雪は、急いで、街燈の下に走った。音は坂の上にきこえた。

ヘッドライトが、松の梢にあたって、黒塗りの大型車

が頭を出した。深雪は思いきり両手を振った。すると奇妙なことが起った。

車がいきなり坂の上で止ったのだ。心なしか、すこし後退するように見えた。まるで、車自体が生きもので、深雪を怪しんで、おびえているような……

へずいぶん気の弱い車なのね

深雪は声をたてて笑いだしたくなった。

エンジンの音が止り、坂道をゆっくりと降りてくる。まるで、おずおずと怖いものにも近よってくるような気配だ。

街燈のあたりが、坂のくぼみになり、そこまできると自動車はひとりでにがくと止った。深雪は、テレビのコマーシャルの司会者のとつときのような微笑を浮かべながら、せいぜい車の持主に気に入られるようにと、運転台をのぞきこんだ。

すこし猪首の半白の頭が、がくりとハンドルによりかかっている。

深雪は、はじめは冗談だと思った。だが、たしかにその男は死んでいた。ぞっとして、あたりを見廻したが、風の音がただ徒らに高く鳴るばかりだ。風と海鳴りのひ

びきと……気がつくのと深雪の心臓の音がこめかみにどきどきしていた。

扉を開けてつくづくのぞきこんだ。車の中には、死の臭いが漂っていた。

ツイードの服を着て、一目でぜいたくに馴れて暮してきている男だと分った。五十をすぎているらしい。どこもかしこも丸い感じである。エルキユール・ポワロという、アガサ・クリステイの主人公がいる。卵形の顔、その口ひげを取り除いたのがその死人の印象だった。

どうしてあのとき、あんな勇気が湧いたのか、我ながらふしぎであった。

深雪は、車のなかにもぐりこむと、ハンドルによりかかっている死人の身体をずらせ、車を始動させた。

さつき崖の上に立っていたとき、向うの松林のなかに、三角形に尖った家の屋根が見えたのを思い出したからだ。

その家まで車をころがして、助けを求めなければ……助けといっても、べつにすることはない。ハンドルからどけるときにさわった手は氷のように冷たかった。ただ、死人をこのまま道の真中に放りだしておくのが冒瀆

のように思われてならなかっただけだ。

よじった姿勢で車をスムーズに運転するのは難かしかったが、どうにか、松林のなかの砂利道に乗り入れて、目当ての家に近づいていった。林のなかにはいると、梅の匂いがきわだった。家の前に植込みがあり、門のわきに常夜灯が灯っていた。繁りあった林の枝にさえぎられて、遠くからはその灯りが見えなかったのだ。クラクションを鳴らしたが、なんの答えも家の中からはなかった。

車を植込みの紅梅の木の下に止め、深雪は門に近づいて、ベルを押した。けたたましい音をたててベルが鳴った。標札もないのだから、空き家かもしれないと思ったのに、ベルが働くのを見ると……

いくらジイジイやっても返事がない。深雪は、鉄の門を押してみた。ギイッと軋んで開いた。

重い樫の木でできている玄関の扉にくっついていてノックカーをたたくと、その瞬間に、その扉も開いた。深雪は、やけっぱちな気持で、家の中にはいった。スイッチをさがしていると、部屋の灯りがついた。いきなりなので、眼がくらくらした。どうして灯りがついたのだろう。

深雪は眉をひそめたが、その理由を考えまいとした。

△電話があるはずだ▽

電話を探して、ともかくも、警察へ電話しよう……それがいまが一番いいはずだ。無性に深雪は、人間の声が好きだった。

死人と空き家と風と梅の匂いと……

深雪は、電話のありそうな場所を探した。玄関をはいたところに踊り場があり、広い廊下が左右に走っている。突きあたりの壁に、青銅の仏像が置いてある。印を結んで虚空を睨んでいるのが、まるで生きているようにいやな気持がした。

カビ臭いしめった空気が、玄関をあけたときの風でふき払われ、その廻りで隣の部屋の小窓の扉がぎしぎし鳴った。

台所か勝手口の方に行けば、電話があるかもしれない……深雪は、リノリウムを敷いた廊下を歩いて右手の部屋にはいった。

応接室。真中にテーブルとイスが三脚。ソファのうしろに大きな天井にまで届きそうな書棚があり、法律、経済に関する書物がぎっしり並んでいた。

電話があった。

深雪は、サイドテーブルの電話に飛びついた。受話器をとりあげたが、あのなつかしい音がしない。切替スイッチがついているのを見ると、この家のどこかの電話と親子電話になっているらしい。

頼みにしていた電話が役に立たないとなると深雪の勇氣がすこしくじけた。

もっと家の奥へ、と思ったが、応接室の次の間は、まっくらだ。この部屋なら、玄関の灯りが硝子を通して射しこんでいるので、せめてもの救いがあった。それにどこを見廻しても、この部屋の電気のスイッチはない。

最後の勇氣をふりしぼって、隣の部屋の扉のノックをまわして、足を踏み入れた。

そのとき、いきなり玄関の灯りが消えた。

はっとなって立ちすくむと、ベルが鳴り出した。心臓がちぢむ思いだ。自動車の警笛がけたたましくひびく。

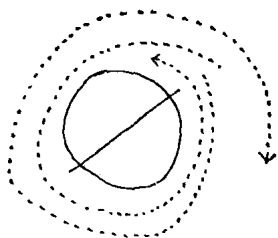
深雪は、宙を蹴って、玄関へ駆けもどった。

外に出た。砂利が靴の下で金属音をたてた。自動車のなかをのぞきこむまでもなかった。死んだ男の姿は消えてしまっていた！

わけの分らぬ悲鳴をあげながら深雪は、雑木の道を国道へ夢中で走った。

夜はポケットに持って歩く
うすむらさきいろの義眼を

エリユアール



おれはどうも、あいつが気に入らない。あいつの顔を見るとツキが悪くなる。人間だれにも、そういう悪いまわり合わせの相手がいるものだ。

久しぶりの日曜日だ。おれは恋人の奈穂子連れて、府中の東京競馬場へ運だめしにやってきた。どうしても奈穂子が、おれといっしょに暮したいというのだ。おれとはイトコ同士。親たちは、二人とも、なにをもちやしてるんだ。さっさとデキてしまえばいいのにと、まるで春先のタケノコが藪から出てくるのを待つように首を長くして待っている。孫の顔が見たいのだらう。なに

も、そんなに心配することはない。

おれと奈穂子とはとくに必要な手続きはみんなすましてある。だといって、手続きは手続き、生活は生活だ。いくら、奈穂子の家が大金持だとしてもだ。女房をもらって、女房のサトからゼニを出してもらうのはコケンにかかわる。

大阪放送、東京支社の報道部勤務のこの葉山健一は、見てくれはりっぱだが、まだやっと、月三万そこそこの収入では、一人前の身すぎ世すぎがやっとだ。

方南町のおれのアパートへ泊りにくるたびに奈穂子

は、おれの貧弱な部屋の調度を見て見ないふりをする。ゆれるたびにやけに軋むベッド。月賦をやっとすましたセミダブル。机とイス。商売用のテープレコーダーやモノシカからない電蓄。洋服ダンスは、奈穂子が、去年のボーナスで、いつかは二人のものになるからいいわね、で買ってくれた。

青山南町の奈穂子のアパートへときどき泊ることがあるが、そのときはすごくヒケ目を感じる。奈穂子の友だちの手前があるので、ベッドはシングルだが、なにかからなまでにちゃんと揃ってやがる。若い娘が見たら、思わずため息が出るようなみごとなアンサンブルだ。ヘヤーブラッシ一つでも、外国雑誌のレデイス・ホーム・ジャーナルの裏表紙にサンプルが出ているような代物だ。

頭にきてしまうのは無理もない。

奈穂子は、J・D・M広告代理店に勤めているから、よく仕事のことと顔を合わせる。ジャパン・ダイレクト・メールの頭文字、J・D・M。そのバッジをつけて、一メートル五四センチ。並ぶとおれの肩ぐらい。ヒップが小さくて、ウエストが細くしまって、かわいいったらない。眉毛がうすく、長く、眼が大きく、すこし受け口の

唇から、小粒の歯が並び、ベーゼするときのタッチのすばらしさ。結婚式をすませたら、必ず剃るという約束の産毛が、光線の加減で金色に光るとき、おれは、おれのすてきな妖精が、この世に生まれ、おれのモノになっているしあわせをしみじみと思うのだ。

まあいいや、そんなことはどうでも。ともかくも、先週あたりから、奈穂子ともやもやはじめた。このままじやいや。放つとくと、浮気をはじめると、重大な通告をしてきた。

あわてて貯金帳をしらべてみたが、坪三万円の土地を五坪も買えば、おしまいだ。五坪で家が建ちますかってんだ。

それで、おれは、運だめしをすることにきめて、府中の東京競馬場へやってきた。

奈穂子には、たまに、なんて、口のなかでもごもごやっておいたが、なあに、ちょいちょい、小出しの運だめしに競馬をやっていたのだ。

同じ報道部の牧定夫の指導による。穴買いの名人で、このレース一荒れくるというカンがすごく働く男だ。たのしいわれらの仲間である。

「いいか、健一。この資本主義社会制度の重圧下においてだ」

と、代々木辺のPRカーの宣伝文みたような前置きをして、

「金を儲けようと思えば、株かギャンブルかその二つをおいてない」

ルオーの描いたイエス・キリストに似てるので、キリストさんという緯名のある牧は、うすくのばしたヒゲをつまんで、並みいるみんなの顔を眺めた。だれ一人同感するものはなかったが、おれには、その一言がジンと胸にこたえた。

それから、ひそかに奈穂子の眼をぬすんで、仕事にかこつたりしながら競馬道に入門してからもう二年になる。勝ったり負けたりないが、師匠の牧ユズリの穴買いで、負けたり負けたり、また負けたりで、たまに大穴をあてても、焼け石に水だ。

だが、今回は、天下公認とあって、おれは、朝早くから専門紙と首つ引きで、はしゃいでいた。土曜日の夜、深夜録音があつて、朝の二時ごろ、奈穂子の青山のアパートへたどりつき、起きたのが七時だというから現金な

もんだ。

奈穂子のオースチンで、渋谷から東宝撮影所の前を通り、一時間足らずで、東京競馬場へやってきた。競馬場正面の広場に車をパークすると、肩を並べて、はいっていった。

黒と白のスポーティなツイードのツーピース。袴につけた真紅の草のバラ。黒のジョーゼットのネッカチーフで頭をすっぽりつつんでいる。

おれは横目で奈穂子を見ながら、ハちゃんとき得てやがらVとつぶやいたもんだ。

正面をはいると、左にバラの花壇が噴水をとりまいて、あちらこちらにベンチが置いてある。若い母親が子供を連れてベンチであやしていたりするのも、日曜日の競馬場風景だ。

右手に小さな丘、丘の手前の斜面は芝生になっていて、子供たちが一日ごろごろころげまわってあそんだりする。どうして池にはアヒルが飼ってあるのだろう。

丘の向うはバドックだ。二十メートルに五十メートルほどの広さのある、この下見所へ、レースに出る馬が一応姿を現わして、フアンの前にお目見えする仕掛けにな